

近代の光と影（後半）

浅野慎一『人間的自然と社会環境：人間発達の学をめざして』大学教育出版、2005年

第 I 部 人間環境と自然・社会 第 4 章 近代の光と影(前半)

《克服すべき「常識」》

近代は、物質主義、産業・経済優先、科学万能、西欧文明至上主義、人間中心主義、一元的な同化の強制、「人間による自然の征服」の時代であり、これが今日の危機的な環境破壊の元凶だ。だから精神・生活・自然を重視し、東洋思想、生命圏平等主義、多元主義等の見方が、現在の危機を克服するオルタナティブになる。

【3. 科学万能主義】

科学万能主義：近代の科学技術・生産力の急速な進歩→自然の完全に制御・管理。

ベーコン¹⁾「人間の知と力は一つに合一する。自然は、これに従うことによって征服される」。

「自然は服従することによってでなければ、征服されない」

「人間が技術によって自然物を生み出し、変化させると期待してはならない」

「人間ができることは、自然物を結合し、分離することのみである。その他のことは、自然が自分のなかで遂行する」

進化論・地動説・万有引力の法則＝人間は自然の一部であって、その逆ではない。

人間にとっての宇宙・自然の無限性を解明。

BUT 人間の知の絶対性の証、自然を征服する人間の無限性であるかのような誤解。

科学万能主義→自然に対する畏敬の念の喪失。

神から解放された人間中心主義→自然からも独立しうる「人間中心主義」の幻想と混同。

根源的な「無知の知」を忘却。

プラトン²⁾「とにかく俺の方がある男よりは賢明である。なぜかといえば、彼は何も知らないのに、何かを知っていると信じており、これに反して私は、何も知りたしないが、知っているとも思っていないからである」。

孔子³⁾「論語」「これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。是れ知るなり」。

「科学的データ」＝現時点での物理・化学機器で客観的に測定できるデータ。

＝その問題に関わる膨大な（無限の）諸事実の中の、測定可能なごく一部の情報。

数字＝「もっとも厳密な合理性と客観性のメタファー」。

「生なましい現実と別れをつける国境線」・量化の基準。

科学的思考：「日常思考からの離脱」、「自然をありのままに見ない」ことが不可欠。

ex) ヒトと人間、政治的人間、経済的人間（ホモ・エコノミクス）、社会的人間。

セン⁴⁾「経済学理論は、…人々は正直であるための経済的誘因がある限りにおいて、その程度まで正直であるにすぎないと考えがちである（ホモ・エコノミクス）。この仮定は真ではありえない。いかなる社会も何らかの行動の規範と規則なしには存立しない。このような規範と規則はまさに経済的な動機づけが不在で、しかも創出できないような領域にとってこそ、その社会にとって不可欠なのだ」。「『純粋な経済人』は事実、社会的には愚者に

近い。しかし、これまで経済理論は、そのような…合理的な愚か者に占領され続けてきた」。
細分化されたディシプリン・方法論→人間や社会に関わるトータルで目的論的な課題設定＝「非
学問的・非科学的」とあらかじめ放棄・排除。

科学万能主義の錯覚←諸科学の専門分化。全体に対する視野と目的の喪失。
要素還元的・分析的手法に収斂。

【4. 利潤増殖・資本主義】

科学万能主義の幻想・錯覚←巨大な生産諸力＝利潤増殖を至上目的とする近代資本主義の生産様式。
近代以前の環境破壊

ex) 四大文明、中世ヨーロッパのペスト、イースター島の巨石文明、飛鳥京・藤原京・平城京。
BUT 近代以前の環境破壊＝特定の地域の文明を滅ぼすだけ。農業。

近代資本主義：産業革命→市場・工業生産、自然を急激な改造→利潤最大化。植民地支配→地球大に
拡張。

科学万能主義の幻想＝近代資本主義の利潤増殖の論理に支えられて — 利潤増殖の「方便」として
— 膨張。

利潤増殖の必要に応じて、「自然への服従」も。

ex) 勤勉、性差別、営利etc. = 「自然」で正常なもの・「本能」。

前近代的・非西欧的な「自然」＝「未開・野蛮」と定義、矯正・克服の対象。

人間の「生命＝生活」より、利潤増殖が重要な目的に。

「近代＝人間中心主義」との批判：紋切り型、一面的。

近代＝「自然の一部としての人間」という認識、唯物論的な人間中心主義（ヒューマニズム）。

BUT 同時に資本主義的生産様式→人間中心主義の喪失

近代の価値の一面的否定＝「産湯を捨てて赤子を流す」。前近代の矛盾に目をふさぐ。

「前近代・伝統的な慣習・技術・生活様式・民俗に学べ」という礼讃・論調の限界・問題。

先住民・前近代人＝「自然と共生する聖者」、「エコロジズムの規範」（?）

雑賀恵子⁵⁾「近代批判に対して、前近代や先住民の『自然に融和的な世界』を対置させると、
前近代や先住民の生活世界が胚胎している抑圧形態を無視してしまうことになる。そして結
果的に、そうした近代批判は、前近代（架空のユートピア・アウトポスはいつだって、あつ
たはずの、どこにもない過去に押しつけられる！）への回帰ないしは郷愁や憧憬へと転回し
てしまい、逆説的に撃つべき対象を従立させている基盤を補完・補強してしまう」。

地球環境の危機的実態を正確な把握：近代科学の知見が不可欠。

近代的なマスコミ・教育を通して人々に普及→近代人によってのみ、人類的・普遍的な課題とし
て認識。

近代・モダニズムの意義と限界の双方を認識する必要。

【5. まとめ】

《克服すべき「常識」》

近代は、物質主義、産業・経済優先、科学万能、西欧文明至上主義、人間中心主義、一元的な同化
の強制、「人間による自然の征服」の時代で、これが今日の危機的な環境破壊の元凶だ。だから精神
・生活・自然を重視し、東洋思想、生命圏平等主義、多元主義等の見方が、現在の危機を克服す
るオルタナティブとなる。

NO! 近代科学（地動説・万有引力・進化論）＝「自然の一部としての人間」の把握。
それに基づく唯物論的ヒューマニズムの創成。（ルソー「自然に還れ」、自然法）

- BUT ①近代科学＝（人間にとっての）目的論・意味論の喪失。（前回の資料を参照）
- ②近代の科学技術・生産力の急速な進歩。
→自然を征服可能とみなす幻想・錯覚（＝科学万能主義）。
- ③利潤増殖を至上目的とする近代資本主義の生産様式。
→1)人間の「生命－生活」に不可欠の自然の急速な破壊。
2)植民地支配＝矛盾・危機を地球規模に拡大。
- 利潤増殖の論理：1)国民国家の一元的支配 & 植民地主義の多元的支配 の使い分け。
2)「自然の征服」 & 「自然への服従」 の使い分け。
- ∴ 近代：深刻な危機とともに、それを認識・克服する潜在力をもつ自然的人間／人間的な自然創出。
& 近代の最大の問題：利潤増殖を至上目的とする資本主義的生産様式。
＝人間中心主義の希薄化。
- ∴ 「物質と精神」、「産業・経済と生活・文化」、「西洋と東洋」、「人間と自然」、「一元性と多元性」等の二者択一は、オルタナティブ足り得ない。

引用・参考文献

- 1) ベーコン, F. (1966) 「ノヴム・オルガヌム」 務台理作他責任編集『ベーコン』河出書房 231頁。
- 2) プラトン (1964) 「ソクラテスの弁明」『ソクラテスの弁明・クリトン』（久保勉訳）岩波文庫 21頁。
- 3) 『論語』（1999）（金谷治訳注）岩波文庫 43頁。
- 4) セン, A. (1989) 『合理的な愚か者』（大庭健・川本隆史訳）勁草書房。
- 5) 雑賀恵子 (1998) 「女——身体になる」『現代思想』vol. 26. 6 青弓社 185～186頁。